国際帝国主義の侵略反革命・第三世界支配を粉砕し、全世界の帝国主義を打倒せよ！世界プロレタリア革命ー世界プロレタリア独裁ー共産主義を実現する新しいインターナショナル（世界単一党）を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

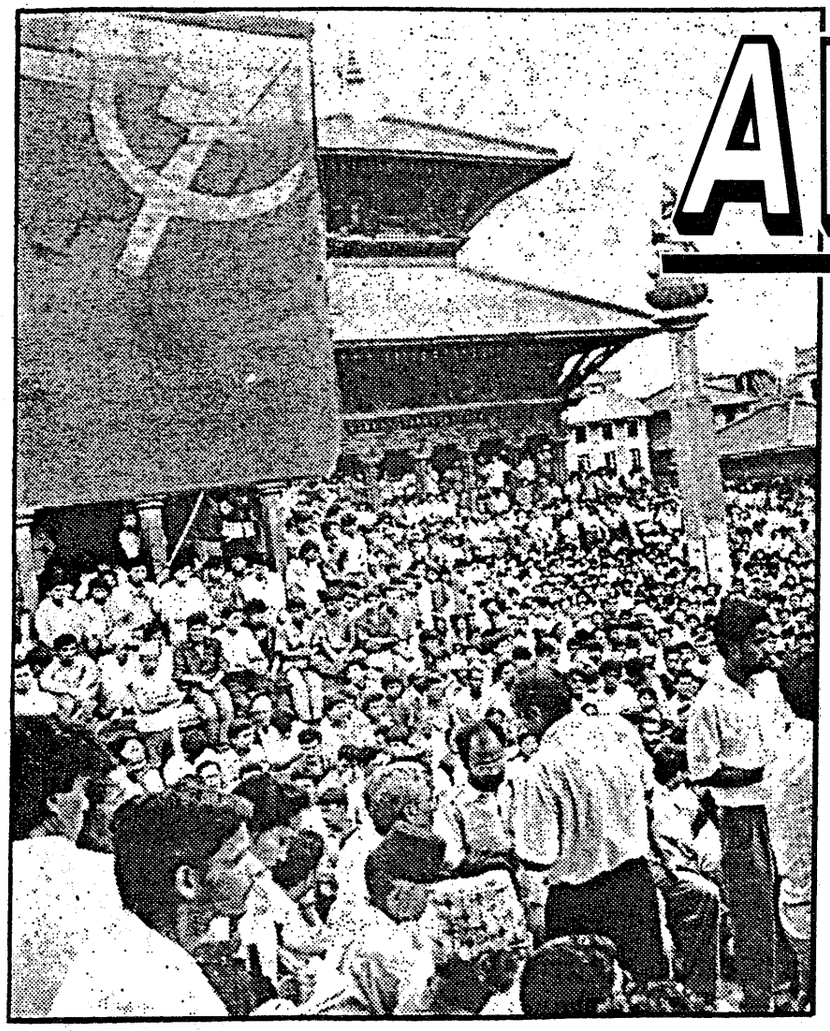
今号の内容
AWC運動の発展を ……P1～6
二大保守政党制攻撃のもとでの党建設の任務 ……P10～12

1994年
4月1日
第465号
編集発行人 海路 薫
一部 200円

烽火

NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）
■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2－8－19
明豊ビル401号 大労協内
TEL.(06)371-3706
○郵便振替 大阪3－63333
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150



政権獲得にむかうネパール人民 93年7月

AWC運動の発展を

アジア集団安保機構創設許すな

一九九二年の一〇月国際会議（ＩＣＯ）にアジア一二カ国・地域から参加した大衆組織の代表は、「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジア・キャンペーン」（以下ＡＷＣと略）という国際的な統一戦線を創設した。ＡＷＣは、九三年において二度のアジア共同行動の組織化と国際幹事会（ＣＣＢ）会議の開催によって大きな発展をとげた。アジア地域と日本における階級闘争の前進のために、すべての共産主義者と先進的プロレタリアートは、ＡＷＣを反帝アジア人民政治統一戦線へと確立していくためにたたかい抜かねばならない。ＡＷＣは、ＰＫＯ法成立二周年にあたる本年六月一五日に四度目のアジア共同行動を組織する。そして、七月にはアジア集団安全保障機構創設―ＡＳＥＡＮ地域フォーラムに反対するアジアでのキャンペーンを組織しようとしている。すべての先進的労働者人民にわれわれは、このたたかいへの総結集を呼びかけるものである。

国際統一戦線建設の戦略的意義

ＩＣＯの開催をもってＡＷＣを創設した大衆組織のたたかいを支持し、これを全力で発展させんとしてきたわが党の実践は、スターリン主義の全面的な破産後の現代世界にあって、国際階級闘争の再建に向けてなされた共産主義党による最も意識的な努力のひとつである。すなわち、このたたかいはアジア・第三世界各国の階級闘争へのわれわれの全力をあげた政治的連帯戦であり、世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍せんとする日本帝国主義との正面戦へとわが国の労働者人民を領導するための渾身の力をふりしぼった共産主義前衛党の決起であった。われわれは、このようなわが党のたたかいへの結集を呼びかけるために、まず以下の諸点を提起したい。

（次ページに続く）

6月 アジア共同行動へ

第一に、アジアにおける国際的な反帝国主義統一戦線の建設は、反帝民族解放－社会主義革命運動を防衛し、国際階級闘争を再建するために現代世界の階級闘争の現実が要請する戦略的任務である。帝国主義諸国をおおう過剰生産恐慌のもとで、米帝・日帝・EC帝は世界の分割支配をめぐって激しく抗争しつつ、「新世界秩序」を掲げて帝国主義による支配へのあらゆる反抗を鎮圧するために他国への共同の軍事介入を世界各地でくり広げてきた。とりわけ、急速な資本主義化が進行するアジア地域は、世界的に見ても日米帝国主義がその支配をあい争う焦点となる地域のひとつである。日米帝国主義は、経済的には激しく支配権を争いつつ、政治的・軍事的には日米軍事同盟を基軸とするアジア集団安全保障機構の創設へと向かっている。こうして日米帝国主義は、アジアにおける帝国主義へのあらゆる反抗を鎮圧し、とりわけフィリピンやネパールなどなお強大な勢力を保持している反帝民族解放－社会主義革命運動を封殺するための新たな支配構造を築きあげんとしている。このような「新世界秩序」を掲げた帝国主義の攻勢に対峙し、とりわけアジアを自らの新植民地主義支配圏として確保せんとする日本帝国主義に対して、アジア人民の共同の反撃を組織することがさし迫った課題となりつづけてきた。この帝国主義との国際的な闘争において、アジア人民はかつてのようにソ連・中国などの「社会主義大国」に帝国主義による攻勢の抑止を期待することはできない。アジア各国の共産主義党と先進的プロレタリアートは国際的な反帝国主義統一戦線を建設し、日米帝国主義に対する国際的な闘争を自ら切りひらいていくことが要求されているのである。この意味において国際的な反帝国主義統一戦線の建設は、ソ連・東欧におけるスターリン主義の崩壊後の帝国主義の世界的な攻勢と対峙しなければならないという現在のさし迫った要請に真っ向から応えんとするたたかいである。

さらに国際的な反帝国主義統一戦線の建設は、アジアにおける国際的な階級闘争を再建し、帝国主義の打倒と社会主義世界の戦取に向けたたたかいの主体である国際主義プロレタリアートを形成していくための戦略的任務である。長期にわたって国際共産主義運動を支配してきたスターリン主義は全面破産をとげたが、その長期にわたる支配は多くの諸国において社会主義革命運動の深刻な後退を生みだしてきた。また文革の破産をもって権力を握った鄧小平路線のもとで、中国共産党もとめどない帝国主義への屈伏の道を進んできた。資本主義のもとで苦悩する人民はますます増大し、帝国主義によるより過酷となる支配はますます人民の反抗を増大させているにもかかわらず、人民の苦悩と反抗は国や民族ごとに分断されたままであり、社会主義革命運動にではなく民族主義や宗教運動の沼地にますます深くとらわれていっている。また、フィリピンやネパールなど共産党の指導のもとに反帝民族解放－社会主義革命の道を進もうとする諸国の革命運動も、深刻な国際的孤立に直面してきた。アジアにおける共産主義党と先進的プロレタリアートは、このような困難な国際階級闘争の現状を変革していくためにこそ国際的な反帝国主義統一戦線を建設しなければならないのである。このことをもって、フィリピンやネパールを始めとした反帝民族解放－社会主義革命運動をアジア人民の力を結集して防衛し、国と民族ごとに分断された階級闘争を結合させ、帝国主義による支配に反抗するアジア各国の人民を帝国主義の打倒と社会主義世界の戦取に向けた国際階級闘争へと全力で組織していかねばならない。このようなたたかいのただ中でこそ、国と民族が異なろうともプロレタリアートは自らの苦悩の原因が資本主義・帝国主義による支配にあることを知り、資本主義・帝国主義の打倒をもってしか解放されることのない共通の運命によって結ばれていることを確信していくことができる。そして、自国における帝国主義と支配階級への闘争が、全世界における帝国主義の打倒と社会主義世界の戦取に向けた国際階級闘争の一部であることを知り、自らが国際的なプロレタリア階級の一員であることを確信していくことができる。国際的な反帝国主義統一戦線の建設は、こうして国際階級闘争の主体である国際主義プロレタリアートを形成するための不可欠のたたかいなのである。

第二に、このような階級闘争の要請に応えるために建設すべき国際的な統一戦線は、反帝アジア人民政治統一戦線である。ここにおいて「反帝」とは、自然発生する人民の反抗を互いに結合し、国と民族ごとに分断された階級闘争を結合させるために提起すべきアジア人民の共通の政治要求＝全アジア人民政治要求が反帝国主義にあることを意味している。矛盾と犠牲を集中されるアジア・第三世界諸国では、日米帝国主義による支配への人民の反抗が絶えることなく発生しつづけている。多国籍資本による過酷な搾取と劣悪な労働条件の強制に対する労働者の反抗、原材料資源や食糧などの第一次産品の収奪への反抗、自然環境破壊への抵抗、元「従軍慰安婦」への謝罪と補償の要求など、帝国主義による支配への自然発生する反抗は決しておしとどめることができない。しかし、これらの反抗は帝国主義による支配そのものとたたかうのではなく、その支配の諸結果の一部に反対するものである。日米帝国主義と各国の支配階級は、これらの自然発生する反抗が反帝民族解放－社会主義革命運動と結合することを何よりも恐れ、帝国主義の膨大な経済力による懐柔と暴力的弾圧をもって日々解体せんとしてきた。アジアにおける共産主義党と先進的プロレタリアートの共通する政治的任務は、このようなアジア人民の自然発生する反抗を帝国主義の打倒と社会主義世界の戦取に向けた階級闘争へと変革していくことであり、国と民族ごとに分断された階級闘争を国際的に結合させていくことにある。そのために最も重要なことは、アジア人民の共通する政治要求＝全アジア人民政治要求を宣伝・扇動していくことにある。このような趣旨から提起すべき全アジア人民政治要求は反帝国主義であり、アジア人民の共通する主敵が日米帝国主義であることから、日米帝国主義の打倒を宣伝・扇動していくことにある。それゆえにこそアジアにおける国際的な統一戦線は、反帝国主義を掲げた統一戦線へと建設されつづけていけねばならないのである。

ここにおいて「アジア人民」とは、組織すべき対象が少数のインテリゲンチアではなく広範な大衆であることを意味している。アジア諸国ではプロレタリアートは少数であり、被抑圧人民の圧倒的多数は農民である。プロレタリアー

昨年六月のアジア共同行動（東京）▶

トは自らの前衛党による指導を通して被抑圧農民階級をプロレタリア階級闘争へと組織していくことが不可欠となる。それゆえ、組織すべき大衆とはプロレタリアートだけでなく、農民を主構成とする他の被抑圧人民を含むものである。さらに、人民の地域的分類としてではなく闘争の主体としてのアジア人民は、自然発生的に形成されるものではない。その意味において「アジア人民」とは、この広範な大衆を全アジア人民政治要求によって結合されたアジア人民へと形成するという階級形成における目的を規定するものである。

広範なアジアの大衆を全アジア人民政治要求によって結合されたアジア人民へと形成すること、このために必要とされる統一戦線の組織的性格は「大衆的政治統一戦線」である。建設すべき統一戦線は、帝国主義による支配の諸結果への大衆の自然発生する反抗と各国における階級闘争の中心的要求をできるだけ広範に糾合するものでなければならない。そして、この統一戦線の内部において広範な大衆が全アジア人民政治要求にもとづく反帝アジア人民政治闘争へと立ちあがっていくような統一戦線である。このような統一戦線は、組織的には何よりもアジア各国の左派労働組合にしっかりと立脚するものでなければならず、労働組合以外の大衆組織（農民組織・学生組織など）をも広範に結集させるものでなければならない。そして、共通の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線は、組織的には何よりもアジア各国の左派労働組合にしっかりと立脚するものでなければならず、労働組合以外の大衆組織（農民組織・学生組織など）をも広範に結集させるものでなければならない。そして、共通の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制へ

ければならない。そして、共通の政治要求にもとづく政治闘争のための統一戦線として建設されていかねばならないのである。

第三に、反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、わが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する日本帝国主義との闘争は、真に国際的な階級闘争として組織されねばならないからであり、アジア・第三世界人民との国際連帯をもって帝国主義的排外主義への組織化を打ち破っていく実践として組織されねばならないからである。保守二大政党制の政治支配体制の転換、そのもとで推進される広範な労働者人民の政府に対する政治的抵抗戦を引きおこしつづけてきた。わが国の共産主義者と先進的プロレタリアートは、これらの労働者人民を反帝アジア人民政治統一戦線のもとへと組織することをもって打倒すべき敵が日本帝国主義であるという確信をつくりだし、共通の政治要求のもとにアジア・第三世界人民と日本労働者人民の結合をつくりだし、日本帝国主義に対する真に国際的な階級闘争に立ちあがらせていかねばならない。反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、まさにこのようなわが国における階級闘争の前進にとってまた不可欠の戦略的任務である。

93年のAWC運動の成果

このような反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、一九九一年三月におけるフィリピンのバヤン（新民族主義者同盟）と日本のＪＰＭ90（日本人民の運動90）の連帯協定締結を基礎として、一九九二年秋の第一回ＩＣＯにおける「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジアキャンペーン」（ＡＷＣ）という国際的な統一戦線体の創設から開始された。ＩＣＯはＡＷＣの創設にあたって、各国・各民族ごとに分断されているアジア人民が共通の政治要求のもとに連帯を強化し、日米帝国主義に対する共同の政治闘争を発展させることを掲げた。そして、この趣旨からＡＷＣが掲げる政治要求を日米軍事同盟および自衛隊の海外派兵との闘争に絞りこみ、この共通する政治要求にもとづくアジア共同行動の組織化に向かうことを決議した。ＩＣＯに結集したアジア各国の大衆組織が、ここからアジアにおける国際的な統一戦線体の建設を開始したことは断固として正しかった。なぜなら、ＡＷＣが反帝アジア人民政治統一戦線へと発展していくために何よりも重要なことは、ＡＷＣが日米帝国主義の打倒と最も深く結合するアジア人民の共通の政治要求を鮮明に掲げることであり、この共通の政治要求にもとづく政治闘争のための統一戦線にあったからである。

こうして創設されたＡＷＣは、九三年を通して反帝アジア人民政治統一戦線へと大きく前進してきたということができる。ＰＫＯ法の成立一周年にあたる六月一五日には、日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対し、アジア人民の連帯を強化しようというＡＷＣ国際幹事会（ＣＣＢ）の提起に応え、アジア共同行動が組織された。フィリピンではバヤンに結集するＫＭＵなどの大衆諸組織がマニラの日本総領事館への抗議闘争に立ちあがった。ネパールにおいても、ＧＥＦＯＮＴ（ネパール労働組合総連合）を中心にしてカトマンズの日本大使館への抗議闘争が組織された。日本においては、フィリピンのバヤンおよびＫＭＵの代表と台湾の労働人権協会の代表の参加によって、東京、大阪、愛知、京都などにおいて集会やデモが組織された。また、日本、フィリピン、ネパール、インドネシア、台湾、マレーシア、インドなどのＡＷＣに結集する大衆組織が連帯メッセージを交換した。一一月には、日帝の国連安保理常任理事国入りに反対する東京での国際シンポジウムと大阪でのアジア人民連帯集会が開催された。これらの集会には、ＡＷＣに結集するフィリピン、ネパール、台湾、インドネシアの代表が参加した。そして、日米開戦日である一二月八日には、九三年における二度目のアジア共同行動が組織された。これには日本、フィリピン、ネパール、インドネシアが具体行動をもって参加し、日本においては東京、京都、愛知、福岡において集会やデモが組織された。

これらのアジア共同行動は、確かに未だその規模においては小さなものであり、ＡＷＣに参加するいくつかの諸国では弾圧の厳しさゆえに実際の政治行動には参加できないという現実も存在している。しかし、このアジア共同行動は、ＡＷＣという恒常的に存在する国際的な統一戦線体に立脚し、アジア各国の大衆組織が共同で計画して組織した闘争であるという意味において、画期的な地平を持ったたかいである。それは、いくつもの国際情勢の変化に対応しつつ、日米帝国主義の打倒という長期的な目的に向けて真に国際的な階級闘争をアジアにおいて組織していく端緒である。

こうしたアジア共同行動の前進を背景として開催された昨年一一月の国際幹事会（ＣＣＢ）会議は、ＡＷＣの新たな発展を切りひらくものであった。その成果は第一に、党から見れば反帝アジア人民政治統一戦線というＡＷＣの基本性格が鮮明になってきたことにある。第一回ＩＣＯの段階では、ＡＷＣの基本性格についてＣＣＢの内部をも含めてなお幅のある理解が存在したことは事実である。ＡＷＣとは、日米帝国主義との闘争におけるアジア人民の共通政治要求にもとづく国際的な統一戦線体であって、情勢の変化に応じて共通の政治要求もまた変化させていくという性格のものなのか。それとも、重要ではあっても日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵という特定の課題のための共闘体なのか。ここに関して、明確な合意がつくられたわけではなかった。しかし、昨年秋のＣＣＢ会議では、このＡＷＣの基本性格に関して明確な合意がつくられてきたと言うことができる。すなわち、ＡＷＣとは各国・各民族ごとに分断されているアジア人民を日米帝国主義に対する共通の政治要求のもとに結合させ、この共通の政治要求にもとづくアジア人民の国際共同闘争を組織するための統一戦線であること。さまざまな個別課題のための国際組織とは違い、ここにＡＷＣの基本性格があることについてもはやＣＣＢ会議の中に不一致は存在していない。

第二には、国際事務局からのアジア情勢報告に立脚して、ＡＷＣが掲げるべきアジア人民の共通の政治要求に関して本格的な議論をおこない、これを一九九四年におけるＡＷＣの政治要求スローガンという形で決議したことにある。ここに関してＣＣＢ会議の参加者が積極的な議

論をおこなったことは、AWCが発展させていくべき新しい質を示すものであった。すなわち、AWCは情勢の変化に応じてアジア人民が掲げるべき共通の政治要求をはっきりと各国人民に提起し、アジア人民の政治的連帯を発展させていくという点において、アジアにおいて他に替わるものがない位置を明確にしたことである。

昨秋のCCB会議は、日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するという第一回ICOから掲げてきた政治要求の発展として、次の三つのスローガンを決議した。①国連を利用した帝国主義による第三世界への軍事介入に反対しよう②日米軍事同盟－アジア集団安全保障機構の創設に反対しよう③日帝の国連安保理常任理事国入り－自衛隊の海外派兵に反対しよう。さらにこれに加えて、④日米帝国主義によるアジア・第三世界への経済的支配に反対しよう⑤日本政府は侵略戦争によるアジアの犠牲者への補償をおこなえ、という二つのスローガンを決議した。

94年における課題と任務

このようにAWCは、昨年のたたかいを通して新しい発展を切りひらいた。第二回ICOに至る過程は、まさしくAWCを反帝アジア人民政治統一戦線として確立していく過程に他ならない。日本帝国主義が世界を分割支配する帝国主義列強へと飛躍する時代にあって、わが国においてもますます多くの先進的プロレタリアートがアジア・第三世界人民との国際連帯の重要性を確信し、アジア第三世界人民との反帝国際共同闘争の必要性を確信するようになってきた。AWCは、このような先進的プロレタリアートの誠実な希求を現実の実践へと発展させる統一戦線である。そして、個別課題ごとや階級層別の国際組織は他にいくつも存在するにせよ、アジアにおける国際的な反帝国主義統一戦線はAWCの発展としてのみ建設することができる。すでにアジア各国の中心的な反帝国主義を掲げる大衆組織が参加しており、各国の階級闘争を領導する中心的な共産主義党や労働者政党がこれを全面的に支持して発展させようとしているからである。われわれは、共産主義前衛党たらんとするすべての政治党派と先進的プロレタリアートに対して、この反帝アジア人民政治統一戦線建設のたたかいに結集し、わが国の広範な左派労組・大衆組織のAWCへの結集をともに推進していくことを呼びかける。この立場から、九四年における国際統一戦線建設の任務について次のように提起したい。

国際共同闘争の組織化

第一の任務は、一九九四年のAWCの政治要求スローガンにもとづくアジア人民の国際共同闘争の組織化を支持し、これを発展させるために全力でたたかうことにある。この九四年秋の国連総会ではいよいよ安保理事会の再編を焦点とする国連改革が直接討議され、国連を利用した帝国主義による他国への軍事介入がさらに推進されようとしている。旧ユーゴスラビアをめぐっては、すでにNATOを実働部隊とした軍事介入が強化され、また朝鮮民主主義人民共和国に対する「制裁」の動きも推進されつつある。着目しておかねばならないことは、このような帝国主義による国連を利用した軍事介入にアジア各国までが動員されていることであり、各国の支配階級が帝国主義からのより多くの経済的援助を得るために自国の軍隊を国連PKOに派兵していることである。また、この九四年にはASEAN地域フォラーム」が開催され、日米軍事同盟を基軸とするアジア集団安全保障機構がいよいよ姿をあらわそうとしている。アジア各国の支配階級もまた、この集団安全保障機構を通して日米帝国主義との軍事的結合を強化し、自らの反人民的支配を延命させんとしている。そして、九五年に向けて日帝の安保理常任理事国入りがいよいよ具体化し、日帝による世界各地への戦略的な自衛隊の海外派兵がさらに推進されんとしている。

これらから明らかなように、国連を利用した帝国主義による軍事介入、日米軍事同盟の再編とアジア集団安全保障機構の創設、日帝の国連安保理常任理事化と自衛隊の海外派兵に反対するという政治要求は、アジア人民にとって共通する重要な政治要求である。日本労働者人民にとって、これらの政治要求はアジア・第三世界人民への連帯と自国帝国主義との闘争という責務から決定的に重視されるべきものである。日本以外のアジア各国人民にとってもまた、自国支配階級への闘争とこれらの日米帝国主義による支配との闘争をますます固く結合させていくことが求められている。このような見地からAWCは、アジア各国の労働者人民がこれらの政治要求を共通の要求として掲げていくように全力で努力しようとしている。アジア人民の共通の政治要求とは、決して自然発生的に生みだされるものではない。この過程は、アジア各国の大衆組織が国際情勢の分析を共有し、アジア人民の共通する政治要求を確立するための議論を積みかさね、各国の階級闘争の中にこの政治要求を定着させていくために共同の努力をおこなっていくという国際的な統一戦線によってしか組織しえない努力である。昨年一一月に開催されたCCB会議は、このような努力を背景としつつ、本年六月一五日に四度目のアジア共同行動を組織すると決議した。アジア人民の共通する政治要求を掲げ、アジア各国人民とともに六・一五アジア共同行動を成功させるためにただちに準備を開始していかねばならない。さらにASEAN地域フォーラムが開催される七月には、AWCはこれに反対するアジアでのキャンペーンを組織しようとしている。日本においてもまた、いまだその危険性が十分に知られていないASEAN地域フォーラムへの批判と暴露を強化し、七月のたたかいに向けた準備を開始していかねばならない。

われわれは、これらのスローガンを紙の上での合意にとどめるのではなく、アジア各国を貫く政治運動へと実践化するために全力をつくす。同時に、これらのスローガンはアジア人民の共通の政治要求を表現するスローガンとして十分なものであるかどうかさらに検討され、練りあげられていくべきものである。さらに、アジア各国の階級闘争の相互支援を発展させていくために、それぞれの国における支配階級との闘争における最も中心的な要求をAWCのスローガンに加えていくことが検討されねばならないと考える。

第三には、アジア各国の階級闘争の現実に立脚したさまざまな要求がAWCの中に持ちこまれ、ICOの提唱者であるバヤンとJPM90以外のアジア諸国の大衆組織がAWCに主体的・能動的に参加していくという新しい段階が始まったことである。このことを最もはっきりと示したのは、ネパールが第二回ICOの開催地として立候補したことであった。ネパール共産党（統一マルクス・レーニン主義派）とその指導下にあるGEFONTなどの大衆組織は、次回の総選挙において議会の多数を占め、政権を奪取することに向けて全力でたたかっている。ネパールが立候補した主理由は、第二回ICOの開催によってネパール人民のたたかいへの連帯を国際的に呼びかけることにあるとともに、AWCを活用して南アジア（ネパール、インド、バングラデシュなど）における反帝国主義勢力の国際的結合を強化していくということにあった。CCB会議において第二回ICOの開催地は日本に決定されたが、ネパールは次回のCCB会議の開催地となることが決定された。KMUもまた、フィリピンにおける国際シンポジウムの開催を提案した。こうしてAWCは、アジア各国のいくつもの大衆組織が共同で責任を負い、共同で推進していく国際的な統一戦線体へと名実ともに発展しつつあると言うことができる。

さらにAWCへのより広範なアジア各国と日本における大衆組織の結集を実現するために、日本帝国主義によるアジアへの侵略とたたかう大衆運動を強化していかねばならない。AWCの結成以来アジア各国の大衆組織は、AWCが日帝の経済侵略とのたたかいをも組織していくことを要求してきた。それは、日本の多国籍資本がますますアジア各国の労働者を搾取・収奪するようになってきたからだけではない。APEC（アジア太平洋経済協力閣僚会議）創設やEAEC（東アジア経済会議）構想のように、帝国主義によるアジア規模での経済的・政治的支配構造が新たに構築されていこうとしているからでもある。昨年秋のCCB会議は、このような新たなアジア情勢に立脚し、日米帝国主義によるアジア第三世界への経済的支配に反対することを共通する政治要求として掲げた。そして、AWCは本年一一月下旬にインドネシアのバリ島で開催されるAPEC会議に反対するアジア規模でのキャンペーンの組織化に向かおうとしている。このたたかいは、AWCに参加するインドネシア人民の闘争を中軸として、アジア各国を貫くたたかいとして組織されるであろう。さらにアジア各国に進出する日帝企業における労働組合のたたかいへの日本の左派労組からの継続的な連帯と支援を組織していくこと、日米帝国主義と各国の支配階級による弾圧や人権侵害に反対するアジア規模での運動をつくりだしていくこと、アジア各国における元「従軍慰安婦」の決起を現在の日帝によるアジア侵略とのたたかいの発展へと結合させるたたかいなど、AWCへの結集を広範に拡大していくための努力が組織されていかねばならないと考える。

各国の闘争の相互支援

第二の任務は、AWCによるアジア各国階級闘争の相互支援の組織化を支持し、これを発展させるために全力でたたかうことである。反帝民族解放―社会主義革命の道を断固として進もうとするがゆえに、帝国主義による封殺と解体の攻撃に直面するフィリピンやネパールなどの南アジアにおける革命運動を防衛することはAWCの重要な課題である。フィリピンでは、この数年の激しい党内闘争―分派闘争のもとで、フィリピン共産党を再強化せんとする努力が組織されつづけてきた。そして、農村・山岳地帯におけるNPAのたたかいを引きつづき発展させつつ、バヤン、KMU、KMP、LFS、ガブリエラなどの大衆組織を再強化し、党内闘争―分派闘争につけこんだ日米帝国主義とラモス政権による革命運動の鎮圧攻撃をはねかえさんとする努力が組織されつづけてきた。またネパールでは、一九九〇年にブルジョア議会すら一切否定したパンチャヤット体制を打倒した人民は、ネパール共産党（統一マルクス・レーニン主義派）による指導のもとで権力の奪取に向かっている。昨年五月一六日の共産党書記長バンダリ氏の殺害に象徴されるような帝国主義に支援された支配階級の弾圧にもかかわらず、ネパール人民のたたかいは決して屈することはない。

さらに、日米多国籍資本による膨大な資本投下によって、アジア・第三世界諸国における帝国主義に従属した資本主義化とプロレタリアートの増大が生みされ、これを背景とした新たな労働運動の高揚が各国において始まりつつある。とりわけ、帝国主義によって支援された長期にわたるスハルト独裁支配のもとにあるインドネシアでは、支配階級の分裂が開始され、スハルト独裁支配の打倒に向けた人民のたたかいが巨大な流動期を切りひらきつつある。本年二月一日には、インドネシア労働者保護連合（SBSI）の呼びかけによって、最低賃金の引きあげ、労組結成の自由、軍による労働運動への介入反対を掲げて全国ストライキが決行された。SBSIの指導部そのものは、支配階級の一部に支援された社会民主主義者やキリスト教民主主義者だと言われているが、このストライキに は多くの労働者大衆が参加した。そして、これらの労働者大衆の内部には、一九六五年に壊滅されたインドネシア共産党の再建をめざし、SBSI指導部の思惑を越えてスハルト独裁政権の打倒に向けてたたかわんとする先進的プロレタリアートが存在している。AWCは、このような各国階級闘争の相互支援を組織していくことにおいて、他に替わるものがない役割を果たしていかねばならない。

来秋ICO開催の準備

第三の任務は、第二回ICO（AWC総会）の準備を領導することにある。昨年一一月のCCB会議は、次回のCCB会議を本年六～七月にネパールにおいておこない、本年一〇月に第二回ICOを日本において開催すると決議した。しかし、ネパールと日本における政治情勢の変化および今秋のAPEC反対闘争の重要性を考慮し、ネパールにおけるCCBは本年秋に、また日本における第二回ICOは来年秋に延期された。第二回ICOは、AWCを反帝アジア人民政治統一戦線として確立することが最大の焦点となる。われわれは、このような第二回ICOの成功のためにはAWCがいくつかの新たな課題に向かっていかねばならないと考える。昨秋のCCB会議において明確になってきたAWCの目的と基本性格を、規約などの適切な形をもって全アジア人民に対して宣言し、そのもとへの結集を呼びかけていくことが大きな課題となるであろう。また、昨秋のCCB会議において開始された政治スローガンに関する討議をさらに発展させ、反帝アジア人民政治統一戦線として掲げるべき政治スローガンを確立していくことが課題となるであろう。そして、CCB参加国以外のAWC参加国の能動的・主体的参加を促進し、まさにアジア十数カ国を貫く統一戦線としてAWCを登場させていかねばならない。同時に、この第二回ICOのためにアジア各国の代表が来日する機会に、日帝の国連安保理常任理事国入りに反対するアジア人民の意志を表現する大集会が、アジア各国代表の参加によって開催される。時あたかも日本の国連安保理常任理事国入りが決定されんとする国連総会中に開催されるこのアジア人民集会は、帝国主義による策動に巨大な打撃を与え、全世界にアジア人民の共通する意志を表明する機会となるであろう。この第二回ICOの成功のために、本年から国際的・国内的準備を全力で開始していかねばならない。本年秋に開催されるネパールにおけるCCB会議は、第二回ICOを準備するものであるとともに、全アジア人民にネパール人民のたたかいへの連帯を呼びかけていく機会となるであろう。第二回ICOの成功とネパール人民への連帯のために、今秋CCB会議への派遣団が編成されていかねばならない。ネパール労働総同盟は、CCBの正規の構成員以外にも多くのアジア各国人民がこの機会にネパールを訪問し、ネパール人民との連帯を発展させていくことを強く希望している。

各国共産党の新しい結合

われわれは、最後にこのような反帝アジア人民政治統一戦線の建設は国際共産主義運動の再建のたたかいによってこそ支えられるものであり、同時に国際共産主義運動の再建のための条件のひとつをつくりだすものであることを提起する。すでに明らかなように反帝アジア人民政治統一戦線の建設は、それぞれの国と民族における階級闘争の現実にしっかりと立脚するものでなければならないことは言うまでもない。この意味において、それは各国の大衆組織が掲げている中心的な政治要求と闘争をできるだけ広範に糾合し、帝国主義と各国支配階級による攻撃からそれらを擁護するものである。しかし反帝アジア人民政治統一戦線は、このような各国の階級闘争の現在の利益を擁護するためにのみ存在するものではない。長期的・戦略的には、それは国と民族ごとに分断された階級闘争を結合させ、全世界の帝国主義の打倒・社会主義世界の実現に向けた真に国際的な階級闘争の再建をめざすものである。すなわち、国と民族を越

えたプロレタリアートの共通する国際的利益、プロレタリアートの階級闘争の未来の利益を擁護し、そのもとに各国・各民族のプロレタリアートを結集させていくという役割をはたしていかねばならない。このような反帝アジア人民政治統一戦線がもつ長期的・戦略的な役割を発展させていく努力は、本質的に共産主義前衛党こそが責任を負うべきものである。なぜなら共産主義前衛党は、プロレタリアートの現在の利益だけではなく未来の利益を代表することにおいて、また一国や一民族のプロレタリアートの利益ではなく国際的な共通の利益を代表することにおいて、プロレタリア階級の最も自覚的部分だからである。アジア各国の共産主義前衛党こそが、各国の大衆組織がこの反帝アジア人民政治統一戦線の建設に結集するように全力ではたらきかけ、この統一戦線の発展のためにできうる限りの努力を組織していかねばならないのだ。

このような意味で反帝アジア人民政治統一戦線の建設を領導しうる党とは、スターリン主義＝一国社会主義路線の誤りを総括し、世界党の再建をめざす共産主義前衛党だけである。スターリン主義＝一国社会主義路線は、一国における革命と世界革命を永遠に切断した。一国のプロレタリアートの利益を国際的なプロレタリアートの利益に従属させるのではなく、ロシア国家の利益のもとに他国のプロレタリアートの従属を要求した。そして、ついにはレーニンによって創設された世界党＝第三インターを崩壊させた。スターリン主義こそ、徹底した反プロレタリア国際主義の路線である。わが党が、AWCを創設した大衆組織のたたかいを全力で支持し、これを反帝アジア人民政治統一戦線へと発展させるためにたたかい抜くことができたのは決して偶然ではない。われわれこそが、わが国新左翼運動の中においてスターリン主義＝一国社会主義路線を最も徹底して批判し切り、世界党の再建を自らの総路線の中に最も鮮明に掲げてきた党だからだ。そして、一九八〇年代においてフィリピン革命への実践的連帯を開始して以来、マルクス・レーニン主義を継承せんとする各国の原則的な共産主義党との連帯を築きあげんとしてきた党だからである。

AWCの創設は、全世界的なスターリン主義の破産が生みだした国際共産主義運動の流動という歴史的な条件が存在しなかったならば、恐らくは成功しなかったであろう。戦後過渡期世界において、ソ連共産党や中国共産党が国際共産主義運動において保持していた権威と支配力は強大なものであった。かつての時代であれば、現在AWCを支持するアジア諸国のいくつもの共産主義党もまた、他国の共産主義党との連帯関係をソ連共産党や中国共産党の意向から離れて自由に築きあげていくことははるかに困難であった。まして、国際的な反帝国主義統一戦線の創設にソ連共産党や中国共産党の意向から離れて指導下にある大衆組織を参加させていくことは困難だったであろう。しかし、ソ連・東欧における社会主義の崩壊はこの状況を劇的に変化させた。かつて強大な支配力を保持していたソ連共産党はすでに崩壊し、鄧小平路線のもとで中国共産党の権威と支配力もまた八〇年代を通して崩壊した。かわって、各国の共産党の新たな結集に向けたいくつもの国際共産党会議が開催され、国際共産主義運動の再建に向けたさまざまな議論が開始されてきた。いくつもの国の共産党と反帝国主義を掲げる大衆組織によって、「新世界秩序」を掲げた帝国主義の攻勢への共同の反撃が模索されてきた。世界的に見ればAWCの創設は、このような国際共産主義運動の流動という歴史的条件のもとで、国際的な反帝国主義統一戦線を建設せんとする、おそらくは世界各地で生みだされているであろう努力のひとつだと言うことができる。

アジアでは現在、AWCを創設した大衆組織のたたかいをいくつもの国の共産主義党や労働者党が支持し、これを発展させるための努力を各国において開始している。もちろんそのことは、スターリン主義の破産の総括と世界党の再建において、これらの諸党がわが党と共通する立場に立っていることを意味しているわけではない。しかし、次のことははっきりと言うことができる。AWCの創設は、反帝国主義を掲げる各国の大衆組織の連帯を新たに生みだしてきただけではなく、これを発展させんとする各国の共産主義党の新しい結合を生みだしてきた。この新しい結合は、アジア・第三世界における反帝民族解放－社会主義革命を防衛し、帝国主義による攻勢とたたかう国際共同闘争を組織していかねばならないという現実の国際的な階級闘争の要請に応えることに基礎を置くものである。ここにおける共同の努力と信頼に立脚しつつ、われわれは国際共産主義運動の再建に向けたわが党の見解を各国の共産主義党に大胆に提起し、率直な同志的論争を組織していくという新しい段階を切りひらいていく。この意味において、反帝アジア人民政治統一戦線の建設は国際共産主義運動の再建に向けた条件のひとつをつくりだしていくものに他ならないのである。

3・16　大阪

ネパール人講師招き

JPM90が学習会

三月一六日、ネパールのたたかう仲間を招き、「ネパール人民の闘いの現状と連帯の課題」と題したJPM90学習会が大阪で行われた。一九九二年の「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対する一〇月国際会議」にネパール労働組合総連合（GEFONT）が結集していらい、ネパール人民の姿はいつもアジア人民の共同行動の先頭に刻印されてきた。昨年には、ネパール共産党書記長らの暗殺疑惑に対してカトマンズを中心にたたかわれたゼネストに、軍・警察の大弾圧がかけられ、多数の死傷者と数千の逮捕者を出した。ネパールからの呼びかけに応え国境をこえた共同の抗議闘争がたたかわれ、JPM90は昨年八月に東京のネパール大使館に抗議のデモを行った。今回のJPM90学習会はこれらの共同行動の上に、学生戦線、労働運動、国際連帯運動の活動家を結集して日本とネパール人民の連帯をさらに深め強めるものとしてかちとられたものである。

●人民の民主主義めざし

講師を引き受けたネパールの仲間は、大きくわけて二つの問題提起を行った。

一つは、ネパール本国の政治状況と人民のたたかいについて。二つめの領域は、日本をふくむ外国におけるネパール人移民労働者のたたかいについてであった。

当日の提起にもとづいて、ネパールの状況を描いてみよう。

ネパールは、半封建・半植民地的な農業国である。一四万七千平方キロの国土のほとんどが山岳・丘陵地帯であり、耕地は一七%、その半分近くが大地主や富農によって所有されている。一九〇〇万の人口の九割が農業に従事しているが、土地をまったく持たない貧農は二百万人におよ

ぶ。総人口の七〇％が貧困線以下の生活を強いられている「世界で二番目に貧しい国」である。この国においては、英国と結びついた百年にわたるラナ家独裁が一九五〇年に人民の闘争によって打倒されたが、まもなくパンチャヤット体制と呼ばれる国王独裁体制が一九六〇年に敷かれて以降、一切の政党活動が禁じられ、多国籍企業やインド資本と結びついた大地主や買弁資本家が国王と結託して貧農を収奪し、人民を支配してきた。この三〇年におよぶ国王独裁に反対する人民の運動は二万五千人の投獄と数百人の虐殺という犠牲の上に、ついに一九九〇年、国王に大きく譲歩させ、パンチャヤット体制を崩壊させ、民主化をかちとってきた。この運動のいったんの成果は、ネパールの資本家・大商人・大地主を代表する政党であるネパール会議派が政権を握ることに結果した。しかし、多くの人民の切ない願いであった、農地の解放や貧困の解決をはじめ、経済・社会・文化のあらゆる面で、人々の期待に応えるような変化は何も起こらなかった。ネパール会議派は人々の期待に背いて、過去の王政がそうであったように、帝国主義や多国籍企業に追随するために活動しつづけた。そして他方、農民の反封建闘争に敵対しつづけ、野党第一党であるネパール共産党を筆頭とした野党・左翼勢力に対しては、殺人や暴力を駆使し、権力と地位を悪用して、今日にいたるまで人民の運動がたたかいとってきた成果をなきものにしてきた。

ネパール会議派は封建地主や買弁資本家の中のリベラルな部分と中産階級の右翼を階級基盤としており、現在、内部に親インド派、親西側資本派があり、極右勢力も入ってきている。ネパールの土地や工場は、これらの勢力によって管理されていて、彼らの搾取によって人民の各階層が抑圧されている。ネパール革命の基本的任務は、これら封建的買弁的勢力による搾取を終わらせ、多国籍資本と帝国主義の支配からの解放をかちとることである。そのモットーは人民の民主主義をつくり出すことである。提起者は、「かつてネパールに対していかなる外国勢力も直接介入し直接人民を支配したことはないが、ネパール会議派を通じてそのヘゲモニーが貫かれようとしている。これを革命的手段を通じて終わらせねばならない」としめくくった。

（エル大阪　3月16日）

●共産党等について質議

参加した活動家たちからは、多くの質問が次々と出され、この南アジアでたたかうネパールの仲間への深い関心と連帯の意欲が感じとられた。前進するネパール革命への連帯を結び目に、以下にあげる数点に参加者の関心が集中し、大要それぞれ次のような説明が行われた。

一つは、ネパールに対する外国資本・帝国主義の支配の現況についてである。

この点については、「中心的な西側資本は米帝であり、ＡＩＤや平和部隊を通じた間接支配が行われている。ネパール会議派は米国の道具である。日帝もネパール会議派を支援している。日本の経済援助は、人民のためには使われず、ネパール会議派支援に使われている。多国籍企業は、ネパールのカーペット生産工場を牛耳っている」との報告があり、とくに日本との関係では日系企業の組立工場が作られつつあり、日本などが出資してカトマンズ渓谷に輸出工業地帯が建設されるという情報もあり共同で情報を集中していくことになった。

二つは、ネパールの各階層の状態と社会変革の基本的要求についてである。

――ネパールの被抑圧階級の大半は農民であり、彼らが耕作する土地は大地主の所有であるため、「土地を、耕す者の手に！」が農民運動の一貫した要求である。ネパール共産党の指導下にあるネパール農民同盟（ＡＮＰＡ）によって運動が進められている。労働者はまだ非常に少ないが、ネパール労働総同盟のもとに着実に組織されている。学生・高校生運動も活発に組織されており、学園内における学生の権利のための闘争のみならず、共産主義的世界観の獲得や国際共産主義運動への関心を高める活動も組織されている。

また、今回の学習会ではくわしい説明はなかったが、封建制のもとで女性がモノ同様に扱われ売買もされ、つい今世紀の始めごろまでは「夫が亡くなれば妻もともに火葬にふす」という制度さえ存在していたネパールで、その共産主義運動の誕生のはじめから、女性が階級闘争・共産主義運動の戦列に決起しつづけているとのことである。

三つは、ネパール人民のたたかいを領導しているネパール共産党と人民闘争との関わりについてである。

「ソ連・東欧の社会主義と共産党が人民に見放されたのとは対照的に、ネパール共産党が人民に支持されているのはなぜか」「共産党のリーダーはどういう人々なのか」などの質問が出された。これにたいし、「ネパール共産党は献身的に草の根の活動でもって人民の闘争を組織しており、人々は共産党の活動だけが自分たちの生活水準を引き上げることができるという信頼感をもっている。共産党のリーダーたちは、かならずしもすべてが貧困層の出身ではないがそれぞれ労働運動や農民運動、学生運動をたたかってきた人々であり、カトマンズ地方だけでなく全土から選ばれてきた人々である」という説明がなされた。

四つは、国外でたたかうネパール人民の運動についてである。

――ネパールの移民労働者のほとんどは、本国では相対的に高学歴である。貧農たちは、貧困を強いられ教育を奪われている結果、外国に働きにいく機会はまずない。ネパールの移民労働者は、韓国や香港、また米国やドイツに散らばっているが、もっとも多いのは日本である。彼らのほとんどは非合法就労を強いられ工場や建設現場で、日本人労働者よりもずっと危険な仕事についている。在日ネパール人労働者は、自分たちの権利と福祉のためにたたかうとともに、日本や日本にいる他国の労働者の運動と連帯し、国際的な帝国主義と反動に対してたたかうことをめざしている。

●連帯の強化を約束して

このほかに、多くの少数民族が存在し、ヒンズー教、仏教、イスラム教が入り組んでいるネパール社会がかかえる民族・宗教問題の実態がどのようなものであり、これに対するネパール共産党とその勢力の側の政策や運動はどのようなものであるのかという点に関心が寄せられたが、終了時間も迫ったため、ひきつづく連帯関係を約束して質疑は打ち切られた。最後にＪＰＭ90の代表世話人である小城修一さんから、「本日の学習会の成果をふまえ、本年秋に予定されているネパールでのアジア・キャンペーン国際幹事会を成功させ、闘争の勝利に向かうネパール人民と連帯しよう」とのまとめの発言が行われて学習会は終了した。

外国人労働者一日行動

第2回

3・14 東京

夜の集会には二百人が参加

世界同時不況のなかで対立を深める米・日・欧州の帝国主義諸国は、労働者大衆に矛盾と犠牲を転嫁しながら生き残り競争を激化させている。日帝にあってもバブル崩壊後の九一年から本格的な不況が襲い、出口の見えない不況のなかで労働者への首切り・合理化攻撃が激化してきている。約五〇万人ともいわれる滞日外国人労働者に対しては、まさに彼らの生命を脅かすほどの差別と排斥の攻撃が進行している。好況時には日本の産業構造の最底辺に組み込まれ安価な労働力を提供してきた外国人労働者は、現在の長期不況下では資本から真先に首を切られ「雇用調整の安全弁」として職場からたたき出され、これに対して多くの日本人労働者は冷淡・無関心、あるいは差別的な態度すらとっている。このようななかで階級的労働運動をめざすわが国の先進的労働者が外国人労働者への支援と連帯に立ち上がり、国籍・民族の障壁を打ち破って労働者階級の国際的団結を実現していくことはきわめて重要である。その意味でさる三月一四日、全労協系労働組合と滞日外国人労働者によって東京で行われた外国人労働者総行動は画期的なものであった。

■□■

抗議行動等相次ぐ

三月一四日、「九四春闘勝利！第二回生活と権利のための外国人労働者一日行動」が組織された。主催したのは、全労協傘下の労働組合などで構成された権利春闘連絡会、神奈川シティユニオン、全統一労組、全国一般東京南部支部、全労協全国一般東京労組、東京東部労災職業病センターなどによる実行委員会である。この日、午前一〇時から、不当解雇された英語学校の外国人教師への支援行動、日本鋼管への抗議行動、労働基準監督署への要請行動、そして労働省との交渉があい次いで行われ、一日行動の最後には国労会館で集会が開かれた。

集会には外国人労働者と日本人労働者のあわせて約二〇〇人が参加した。司会を担当した神奈川シティユニオンの村山さんは最初に、昨年につづいて二回目となる今回の集会では、前回の反省から日本人発言者の内容を事前に翻訳したり、また外国人労働者の歌や民族楽器の演奏をおりまぜたりする工夫がされていることを報告した。つづいて連帯あいさつに立った全労協の荒井さんは、外国人労働者総行動のなかで滞日外国人労働者の権利がいかに踏みにじられた状態にあるかを痛感したと語り、労働組合の結集体としては全労協だけがこの問題に取り組んでいるが、外国人労働者が安心して働くことのできる状況をつくるために、労働省や政府にしっかりとした対策をさせるよう取り組んでいくと発言した。国労闘争団は国鉄闘争の現状を説明し、分割・民営化により自らが差別・選別されてきた経験からいまの日本社会がいかに差別的な社会であるのかを暴露した。そして、国家的差別と不当労働行為を絶対に許さない、たたかう以外に人権はない、差別のない社会に向けて中労委命令を足がかりにたたかうと決意表明した。

次に韓国からの訪日団が登壇した。彼らは九老公団など地域労働運動の活動家であり、外国人労働者が急速に増加している韓国で、外国人労働者のための労働相談や権利獲得闘争に着手し始めているという。訪日団の代表は、「私たちは、内国人でも外国人でも同じ労働者として同等の権利があることを学んでいる。日本と韓国では外国人労働者への差別が特にひどい。不況下では解雇はそれ自身が殺人的行為となる。国籍を越えていっしょにたたかいたい」と発言し、その後「アリランの歌」と「イムの行進曲」を日本人労働者とともに歌った。イムとは尊敬する同志を意味し、「イムの行進曲」は労働争議などで歌われている韓国労働運動のスタンダード・ナンバーである。合唱のあと、韓国人労働者と日本人労働者は「万国の労働者は団結せよ」と力強くシュプレヒコールをあげた。

■□■

権利もビザもない

各団体からの決意表明が行われる。最初にFLU（外国人労働者組合）が発言した。ブラジル、バングラデシュ、パキスタン、スリランカ、イランなどの労働者が加入するFLUの代表は、滞日外国人労働者が抱えるさまざまな問題を話し合いながら、その解決のために運動していることを紹介し、「仕事がなくなると一番先に外国人が首を切られる。仕事のなかでは権利が認められていない。またビザがない。ビザがあれば今日の集会でもこの百倍は来たはずだ。でもビザがないから怖い。ビザの問題がなくなったら、権利を広げるようみなさんといっしょにたたかいたい」と集会参加者に滞日外国人労働者をとりまく問題の一端を提起した。東部労職センターは、外国人労働者の労災問題について発言し、プレス機械で指を落としたり建設現場で転落したりする事故が多いが、職場でケガをした場合には労災保険で直るまで治療をうけるべきであることを訴え、また外国人労働者の労災損害賠償裁判において裁判所が外国人は日本人と差別された当然とした問題を提起し、こうした差別を許さない

（国労会館　3月14日）

たたかいをと呼びかけた。神奈川シティユニオンは、外国人労働者への労働相談を始めてから三年間に約九〇〇人の外国人労働者（うち韓国人が約八〇〇人）が労災・解雇・賃金未払い・暴行などの問題でユニオンに接触してきたこと、ことしは賃金未払いと解雇問題の相談が多いことなどを報告した。さらに一〇人の外国人労働者が労災の損害賠償で一、二年の長期闘争を進めていること、ユニオンで月二回の一日行動をしていることなどにふれながら、民族・人種・国家・性別を越えて人間的信頼と共感をはぐくみ、働くものが自分たちの社会をつくっていくための共同行動を強めようと呼びかけた。

次に一日行動の報告が全統一労組の鳥井さんから行われた。午前中には、NCBという会社の前に約五〇人の労働者が集まり外国人教師に対する解雇撤回の要請書を提出し、昼には日本鋼管に対し韓国人二名、日本人一名の労災問題で責任追求を行い、また上野の労基署に対しては賃金未払い事件で賃金確保法による立て替え申請を行って要求を実現し、そして労働省との交渉では労災保険の給付金を使用者が横領した問題や、労災保険を使わずに労基署の監督官立ち会いで示談にした事件を取り上げ、外国人労働者をとりまく諸問題を突きつけたなどの成果が報告された。さらに鳥井さんは、去年よりも日本人参加者が増えたことをつけくわえ、外国人労働者の権利について考え行動することは日本の労働組合・労働運動の責任であり義務であることを強調した。

■□■ 歌や楽器の演奏も

再び各団体の活動報告などがつづく。全国一般南部支部からは、解雇を受けた外国人教師がバグパイプを演奏した。NCB分会からの発言者は、南部支部には現在約四五〇人の外国人メンバーがいるが、その多くの職場が語学学校であり、不況の深刻化とともに賃金未払い・閉鎖が増え、去年だけで六つの組合ができたことを報告した。つづいてFWBZ（全統一労組外国人分会）からインド人労働者がインドの歌を披露し、発言に立った全統一のラナさんは次のように訴えた。「解雇・未払い・労災などの問題を監督署はまじめに聞いてくれない。私たちが不法就労者だからか。権利が守られていない。監督署と入管でしめつけられながら、家族のために私たちは日本でがんばっている。どんどん状況は悪くなるが、生活と権利を守るために日本のみなさん応援してください」。イラン人労組準備会の発言者は、日本政府は外国人労働者の権利を認めよ、差別的態度をやめろと告発し、日本の労働組合は外国人労働者を受け入れてほしいと主張した。そしてとくにビザ問題をとりあげて、自衛隊がカンボジアやソマリアへいくのにビザがあったのかと問いかけ、滞日外国人労働者の権利と生活をまもるために自たちの力でがんばろうと発言した。

その後、イランの民族楽器であるサントゥールが演奏され、アンコール演奏を求める大きな拍手がわき起こった。

行動提起が全統一労組のラナさんから行われ、「みなさんといっしょにメーデーをがんばりたいと思います。千人の外国人労働者を集めてたたかいたい」との発言に、会場からはどよめきの声があがった。その後、参加者全体で「ウイ・シャル・オーバーカム」が歌われ、最後に全労協の小野寺さんが団結ガンバローで集会をしめくくった。

■□■ 国際主義の実践を

第二回の外国人労働者一日行動は成功した。何よりも、滞日外国人労働者が自らの権利と生活・生命を守るために、自ら組合を結成して活動する動きが本格的に始まり大きく広がってきている。資本の側は不況の矛盾と犠牲を相対的下層労働者、とくに滞日外国人労働者に転嫁し、これに入管が取り締まりを強化して加担している。たたかう日本人労働者・労働組合は、自らの内部にも発生する帝国主義的大国主義・排外主義とたたかい、労働者階級の国際主義的連帯と団結の思想を獲得するために、滞日外国人労働者への差別・排斥とたたかい、彼らへの支援・連帯を全力で進めていかなければならない。

階級闘争の後退、あるいは階級意識の解体がわが国の労働者とその運動に関して指摘されて久しい。それは日本の労働者が自らを真に国際的な階級として形成していく努力を低下させてきた結果であり、またそのような闘争・運動・戦術・組織が、わが国の階級闘争のなかに創出されていないことに原因はある。PKO派兵や国連常任理事国入りなど、日帝の政治的軍事的突出がはっきりとした今日、日本帝国主義と対決し、アジア・第三世界諸国人民、滞日外国人労働者への支援と連帯と共同行動にわが国の労働者を組織することが決定的に重要な時代に突入したことをわれわれは自覚しなければならない。「万国の労働者、団結せよ」というプロレタリア国際主義の精神を実践に移すときは今である。

NAW等の主催で

3・10 コメの自由化とアジアの人々テーマに講演会

大阪

三月一〇日、大阪で「コメの自由化とアジアの人々」と題する講演集会が、大阪中央地域日朝共闘とNAW（アジア労働者情報交流センター・関西）の主催で行われた。店頭からコメが姿を消し、「平成コメ騒動」に日本国中がわきあがっていた時期だけあって、会場は約五〇人の参加者でぎっしりとうまった。

まずはじめに主催者から「アジアの労働者との連帯を強めていくという観点から、日本のコメの自由化がアジアの人々、アジアの労働者・農民にどのような影響を与えるのかを考え、どのような連帯が求められているのかを考えていきたい」と、この日の集会の目的が話された。

講演者の辻井博さん（京都大学農学部助教授）は「二〇年間にわたってアジアの稲作やアジアのコメ政策などの研究を続けてきた」という自身の体験をふまえて、戦後の日本を含むアジア地域のコメ政策―「自給自足、安定供給、米価安定」についてふれ、世界のコメの約九〇%がアジアで生産され、そしてアジアで消費されているという事実から、アジアにとっていかにコメが大切であるかということを力説した。その上でコメの自由化は日本の農業の破壊に

つながること、また世界で三億人といわれている飢餓状態にある人たち、そして七億人といわれる貧困状態にある人たちは国内コメ価格の高騰によって、よりいっそうの飢餓と貧困に苦しめられるだろうと話した。

最後にNAWの代表者から、「アジアの農業労働者の側には、日本はコメを輸入すべきだという意見もある。アジアの労働者との連帯という視点で、私たちは今日の集会を出発点にして、今後も日本のコメ自由化問題を考えていきたい」というまとめの発言が行われた。

「日本のコメ自由化」を、日本の農民、日本の国民にとってどうかという観点だけから見ようとする昨今の世相の中で、アジアの人々の視点から見ようとする発想は発展させていかなくてはならないと痛感させられた集会であった。

二大保守政党制攻撃のもとでの党建設の任務

われわれは、わが国の階級闘争の発展のために、わが国の共産主義者と先進的労働者に対して以下の問題について提起したい。すなわち、わが国の階級闘争を指導する強大な共産主義政党を建設する事業への結集について、また、わが国の階級闘争をともに発展させるための政治闘争に関する新たな党派間共闘の形成と、そのための共同の努力の開始について。さらに、二大保守政党制攻撃のもとで根拠をもって発生する新党形成運動に対していかなる態度をとるべきかを明確にし、わが国階級闘争の前進のために共産主義者が共同のたたかいを組織することの必要性についてである。

党建設への結集を呼びかける

日本共産党は、自分たちがソ連や東欧のスターリン主義とは無縁であることを証明しようと、「社会主義をかかげたブルジョア民主主義・ブルジョア議会主義」へのいっそうの純化をとげている。日本共産党は、①日本帝国主義の侵略反革命の免罪②第三世界の反帝民族解放－社会主義革命への敵対③日本帝国主義の超過利潤を前提とする改良主義と帝本国城内平和の防衛、という点において、ますますその反プロレタリア的性格を強めていっている。

また、現代カウツキー主義潮流は、階級と階級対立の存在そして階級闘争を意識的に否定し、これに「市民」「民衆」という没階級的見地と運動主体を対置する。彼らは帝国主義と被抑圧民族の存在の意識的な否定の上に、民衆コスモポリタリズムを対置する。彼らは国家が階級対立の産物であることを否定し、そして当然にもブルジョア階級とその国家の打倒へと向かうことを実践的に否定する。そして、政治への民衆

進む社会党の保守政党化。連合の懇談会に出席した村山委員長（前列右）

しかし二大保守政党体制は、労働者大衆をこのもとに統合していこうとするブルジョアジーの意図とは逆に、これに集約されることのない広範な労働者大衆の抵抗闘争を再生産する。そして、労働者大衆の利益を部分的に代弁したかつての抵抗政党たる社会党の消滅は、逆に、労働者階級の中に自己の利益を真に擁護する政党への潜在的要求を増大させていく。

こうした中で、あらゆる政治組織が、いったいどのような道を歩むのかということが厳しく問われる時代に等しく直面し始めた。こうした時、日本共産党はブルジョア議会内での生き残りをかけて社会民主主義的変質をいっそう促進している。また、いわゆる新左翼圏内の少なからぬ部分は、社共の反対派として存在できたかつての階級闘争構造の最後的崩壊を前にして、社会党の保守党化に対応した新党形成の動きに期待し、共産主義から社会民主主義への転向をもってこれに合流しようとしている。スターリン主義の敗北と対をなして現代カウツキー主義が台頭し、「マルクス・レーニン主義の見直し」などとしたり顔をして共産主義を投げ捨てる種々の清算主義の傾向が流行しつつある。

ソ連・東欧におけるスターリン主義支配の崩壊に乗じて、ブルジョアジーとそのあらゆる手代は叫び続けてきた。「社会主義・共産主義は敗北し、その生命力を完全に失った。もはやそれらは脅威でもなんでもない」と。そして帝国主義諸国においては、相対的上層労働者を中心とする多くの労働者人民がこうした反共産主義宣伝と帝国主義的イデオロギー攻撃を受け入れてきた。

また日帝は、米・EUとの帝国主義間抗争の激化に対応し、これに打ち勝っていくために、平和貿易立国路線からの転換と国内階級支配の歴史的な再編成を開始してきた。二大保守政党制への政党再編と社会党の保守党化が進み、わが国の階級闘争の構造は大きく変貌し始めた。ブルジョアジーは、二大保守政党とそれが支配するブルジョア議会のもとに労働者大衆を統合する政治機構を作り上げることによって、階級支配の安定をはかろうとしている。そしてブルジョアジーの基本政策に反対するあらゆる政党をブルジョア議会から一掃することで、侵略反革命と反動的諸政策を好きほうだいに推進していこうとしている。

参加と言いながら実際は現代版の構造改革主義としての実践的役割を果たす。現代カウツキー主義は、今日いわゆる市民運動として表現されている労働者の多様な自然発生性を、階級闘争へと発展させる新たな創造的努力へと向かうのではなく、実はこうした反階級的な道へと積極的に導こうとするのである。現代カウツキー主義の階級的基盤は、帝国主義の莫大な超過利潤によってプチブル化した上層労働者と広義の小ブル層とその運動にある。そしてその政治的本質は、いかに粉飾しようとも結局は共産主義の否定とブルジョア民主主義に帰結する。

だが新たな階級闘争の世界的な現実は、むしろスターリン主義と決別した新たな国際共産主義運動の再建こそを要求している。マルクス・レーニン主義を現代に継承し、第三インターナショナルを復権し国際共産主義運動の団結を再建するたたかい、そしてその一翼を担う、わが国における労働者階級の国際的・国内的利益に貫かれた力強い共産主義政党の建設こそを要求している。そして、社会民主主義、現代カウツキー主義の誤りと決別すべきことを教えている。

「社会主義の敗北と資本主義の勝利」というブルジョアーの思想攻勢にもかかわらず、事実は、こうした資本主義・帝国主義イデオロギーとその反共宣伝を急速に色あせたものにしつつある。ソ連・東欧のスターリン主義の崩壊にかわって現れたものは、帝国主義が掲げたバラ色の「世界新秩序」ではなかった。それは、旧ソ連・東欧圏諸国の資本主義への移行と、資本主義民族国家創設に向けた民族排外主義の嵐のような扇動と、果てしのない戦争と動乱であった。むきだしの資本主義支配のもとに投げ出された旧ソ連・東欧圏の労働者階級の抵抗闘争の激化であった。第三世界における矛盾の激化と反帝民族解放－社会主義革命闘争の止むことのない噴出であった。また帝国主義諸国に共通して現出したのは、世界同時過剰生産恐慌と日・米・EU帝の帝国主義間抗争の果てしない激化と失業のまん延であり、帝国主義各国のブルジョア政府による相対的下層労働者の構造的な切り捨て政策であった。

そして、わが国の労働者階級を襲いつつあるのも、過剰生産恐慌のもとでの激しい合理化、構造化する失業、不安定雇用労働者の大規模な再生産であり、相対的下層労働者の構造的な拡大と再生産である。そして、すでに細川政権がこのかん矢つぎばやに打ち出したように、増税や年金支給年令引上げ等、ブルジョア政府による相対的下層労働者の構造的切り捨て攻撃の本格的な幕開けである。賃金奴隷としての労働者階級の苦悩は、現代資本主義のもとでより深化し拡大している。階級と階級対立の存在を否定する現代カウツキー主義者は事実をもって反駁されている。さらに、わが国の労働者階級が直面していくのは、労働者階級のいかなる抵抗闘争とその利益をも代表することのない二大保守政党制支配への移行である。だがそれは、労働者階級が自己の真の利益を代表する政党を求めるざるをえない時代の本格的な到来をも意味している。だからこそ、資本主義と帝国主義支配こそが、あらゆる労働者の苦悩の源泉であることと、賃金奴隷としての労働者階級の資本への従属とそれゆえの苦悩は、現代資本主義のもとでより深化し拡大していること、そして、スターリン主義と決別したプロレタリア階級闘争と共産主義運動のみが、唯一未来を切り開くことができるということ、こうした確信が大胆に復権され、かつ新しく創造されていかなければならないのである。

そのために、労働者階級の現実の苦悩と怒りに依拠し続ける党、国際主義に立脚し続ける党、日本帝国主義と対決する労働者階級の前衛分子を結集させる党、こうした内実をもった共産主義前衛党こそがわが国において力強く建設されていかなければならない。そして、日帝がアジア・第三世界を自己の勢力圏としてうち固めながら国際帝国主義として突出していこうとするこの時代、アジア・第三世界の反日帝闘争と社会主義革命に連帯し、日本帝国主義の打倒へと向かうわが国の階級闘争の発展を組織する革命党こそが建設され続けなければならないのである。こうした党建設への道へ、全国の先進的労働者が結集し、ともにたたかうことをわれわれは訴える。

新党形成問題への原則的態度

二大保守政党制への再編成と抵抗政党としての社会党の消滅という事態を前に、新党を形成しようとする努力が社会党内の一部や先進的労働者、あるいはさまざまな市民運動を担う人々によって開始されてきた。「護憲新党」あるいは「社会新党」「勤労者党」等々と言われてきた新党構想の帰すうは、社会党内部における「護憲派」と「デモクラッツ」を中心とする右派の対立がいかなるものとなるかによって大きく左右されざるをえない。すでに社会党の地方組織における分裂も開始されつつある。だが、いわゆる新党形成の可能性は、それの規模において、およびその労働者大衆への影響力において、また、その質においていまだ大きな幅を有している。現状においてそれは、社会民主主義者や現代カウツキー主義者、さまざまなイデオロギーを内包した広義の抵抗政党の形成として進んでいる。当然にもそれは労働者階級の階級的利益に立脚するものではなく、むしろ、人民一般、そして反プロレタリア的な要素をも含む人民の抵抗闘争一般に立脚するものである。だがこの新党問題は、二大保守政党制下におけるわが国の階級闘争にとって少なからぬ影響を与える問題である。全国の共産主義者と先進的労働者は、この問題についての原則的態度を鮮明にすることが要求されている。

二大保守政党制への政党編成は、自民党再分裂と社会党分裂の可能性を内包する与野党貫く再編過程の第二幕に入った。小選挙区制導入下での次の国政選挙に向かって、政党再編成は一挙に加速せざるをえない。だが、当面の政党再編がいかなる姿をとろうとも、次のことはもはや避けられない事態となる。それは、二大保守政党制への再編成とかつての抵抗政党たる社会党の消滅、およびその保守党への純化という局面のもとで、人民の抵抗闘争を国会に反映できる政党が、今後はその可能性としては日本共産党以外には存在しなくなることである。かつての時代にあっては、社共－総評が人民の抵抗闘争を糾合しこれをブルジョア議会内へと集約し続けた。だが今日、社会党は保守党への完成をとげた。連合指導部は、その突撃先兵の役割を果たし続けている。そして、日本共産党はブルジョア議会主義へのいっそうの純化をとげ、人民の抵抗闘争を組織する体質をますます喪失していっている。

ブルジョアジーにとっては、二大保守政党制は、その基本路線において本質的な相違のない二大保守党が支配する議会のもとへと労働者大衆の要求や不満を集約することによって、国内の階級支配の安定をはかろうとするものである。そうすることによってブルジョアジーは、国内外の労働者階級の犠牲の上に、激化する帝間抗争に勝利するための攻勢を進めようとしている。だが他方では、ブルジョアジーの意図とは別に、二大保守党が支配するブルジョア議会のもとに集約されることのない、広範な労働者大衆の抵抗闘争・反政府抵抗闘争が構造的に不可避に再生産される。だがすでに、抵抗政党としての社会党はなく、日本共産党もこれを組織する質を喪失している。こうした状況の到来こそが、新たな議会内抵抗政党としての新党形成を要求する根拠である。そして、決して止むことのない労働者人民の反政府抵抗闘争の自然発生性こそが、現在の新党形成運動が一部において依拠している大衆的基礎である。

この労働者大衆の抵抗闘争に対する共産主義者と先進的労働者の政治的前衛任務は、何よりも、アジア・第三世界の反日帝闘争と連帯し自国帝国主義の打倒へと向かう政治闘争・階級闘

争へとそれらを発展させていくことにある。

共産主義者は、労働者大衆の抵抗闘争を発展させ、これをブルジョア議会内に反映させていこうとする限りにおいては、新党形成運動と特別の対立関係をもたない。また共産主義者は、労働者大衆の反政府抵抗闘争を発展させ、これを国際主義に立脚する政治闘争（階級闘争）の一翼へと発展させていくという見地から、新党形成を推進する人々との反政府抵抗闘争をめぐる大衆的な共闘を積極的に発展させなければならない。われわれはこれまで、新党形成に向けて奮闘してきた多くの誠実なたたかう労働者活動家に敬意を払ってきたし、それは今後も変わらないだろう。

だが、次のこともまたはっきりさせられねばならない。現在の新党形成運動を支える労働者大衆の自然発生性は体制内改良運動のそれであり、かつまた、要求されている新党はブルジョア議会内抵抗政党としてのそれである。したがって、二大保守政党制のもとで抵抗闘争に立ち上がる労働者大衆を、ブルジョア議会のもとでの体制内改良運動へと集約させることなく、日本帝国主義の打倒へと向かう革命的階級へと形成しぬくのは、共産主義者にのみに課せられた独自の任務なのである。

したがってまた、他ならぬこの点をめぐって、社会民主主義者、現代カウツキー主義者と共産主義者との党派闘争が存在する。社会民主主義者は資本主義の改良以上を絶対に望みはしない。現代カウツキー主義者は、粉飾された種々の言葉で、結局は階級闘争の発展とブルジョアジーの打倒ではなく階級闘争の否定と階級融和を説き、実践上はブルジョア民主主義的改革以上を決して踏み出ようとはしない。

共産主義者は、その信条を隠すことはしない。労働者大衆の反政府抵抗闘争を発展させ、そのたたかいのただ中で、社会民主主義者、現代カウツキー主義の影響のもとから労働者大衆を解き放っていかなければならない。そして、労働者大衆の反政府抵抗闘争のただ中から、国際主義に立脚し日本帝国主義の打倒へと向かう、わが国革命的プロレタリアートの大軍を組織していかなければならない。

新たな党派間共闘建設しよう

最後にわれわれは、日本帝国主義のアジア・第三世界支配を粉砕しアジア・第三世界人民と連帯するわが国政治闘争の発展を願うすべての誠実な党派に対して、わが国の政治闘争を発展させるという目的のもとに、共産主義党派を中軸としたすべての反帝国主義党派による新たな党派間共闘を形成することを呼びかける。

帝国主義間抗争の激化に対応して日帝は、アジア・第三世界を自己の経済圏へとうち固めながら国際帝国主義への突出を開始した。それは、アジア・第三世界諸国を始めとして全世界で反日帝闘争が不可避に勃興する時代の開始であった。アジア・第三世界諸国の人民にとって、日本帝国主義が米帝と並んで直接の打倒対象として登場する時代の開始であった。そしてわれわれは、こうした時代の開始のなかで、日帝本国の労働者階級を、アジア・第三世界諸国の反帝民族解放－社会主義革命に連帯し、自国帝国主義の打倒へと向かう政治闘争に組織していくことが何よりも必要であると確信してきた。

そしてわれわれは、アジアにおいて日米帝国主義と対決する国際的な統一戦線を、反帝アジア人民政治統一戦線として提起し、アジア諸国の人民組織によるその建設を全力で支持してきた。また、これと結合して日本プロレタリアート自身が建設すべき政治闘争の戦略的質を、反日帝・国際主義・プロレタリア政治闘争として提起し、そのたたかいとるべき組織をこのためのプロレタリア大衆政治統一戦線組織として提起してきた。

こうした努力は、国際的・国内的に大きな成果を生み出してきた。それは、アジア一二カ国・地域の人民組織によって形成される反帝アジア人民政治統一戦線＝「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジア・キャンペーン」と、これと結合する日本国内におけるアジア共同闘争の政治闘争としての全国的発展であった。

こうした政治闘争を新たな段階に発展させる努力が、いよいよわが国の階級闘争の発展の要となるような時代が到来しようとしている。

日本帝国主義の国際帝国主義としての突出は、アジア人民の戦後補償要求を欺まん的に決着づけながら国連常任理事国入りを実現しようとする段階に入りつつある。また、派兵－改憲攻撃は、わが国の政治闘争の第一級の闘争課題となってきた。日帝は激化する帝国主義間抗争に打ちかつていくために、アジア・第三世界を自己の独自経済圏へと編成していこうとし、米帝との対立を内包しながら、日米共同でアジアにおける集団安保体制の形成へと踏み出そうとする本格的な策動を開始し始めた。七月ASEAN地域フォーラム、そして一一月のAPECはこうした策動と不可分一体のものである。

こうした日帝のアジア・第三世界支配の強化は、アジア・第三世界諸国の至るところで反日（帝）闘争を激化させている。日帝の自衛隊派兵に反対するアジア・第三世界諸国の人民のたたかいがある。日帝の戦後補償を要求するアジア諸国人民の怒りとたたかいがある。日帝企業の搾取のもとで呻吟するアジア・第三世界諸国の労働者階級の不屈のたたかいがある。日帝の第三世界支配のもとで貧困を強要され、性を売ることを強制される女性たちの苦悩と怒りがある。さらに日帝本国において、低賃金と無権利状態を強要される滞日・在日外国人労働者の苦悩とそのたたかいがある。こうした日帝支配がもたらす第三世界人民のあらゆる貧困と苦悩は、日々深化し拡大し続けている。

日帝本国の労働者階級こそが、こうしたアジア・第三世界諸国の人民の日々の苦悩とたたかいに対して、彼らの兄弟姉妹として真に連帯することができる唯一の階級である。さまざまな反階級的な国際運動に溶解することのない、労働者階級の国際連帯を発展させること、日帝本国の外国人労働者のたたかいを防衛し、排外主義と対決する単一の階級的団結をたたかいとっていくこと、そして、日帝と対決するアジア諸国人民の国際的共同闘争を政治闘争として発展させること、こうしたことが急務となっているのである。

こうした要請に対して、すべての共産主義党と反帝国主義党派が、わが国の労働者大衆の反政府抵抗闘争をアジア・第三世界の反日帝民族解放－社会主義革命闘争と連帯する反日帝政治闘争へと発展させていかねばならないという国際主義的責任を等しく負っている。この等しく問われているところの国際主義的責務に応える努力の一つとして、われわれは、反帝アジア人民政治統一戦線と結合したわが国におけるアジア共同行動を、日本帝国主義と対決する政治闘争としてともに発展させること、このための党派間共闘を作り上げていくための共同の努力を、ともに開始していくことを呼びかけるのである。

こうした目的をもった党派間共闘は、国際主義に立脚し続ける労働者階級の政治闘争を実践的に創造し前進させるという点において、原則的な反帝勢力相互の団結を前進させ、また互いを鍛え合うことを可能にするであろう。われわれは、そうした共同の戦場をぜひとも作り上げていきたいと願っている。それが、わが国の階級闘争の発展に責任を負い、日本における反帝闘争と共産主義運動の発展を組織していく事業にとってきわめて重要であると確信するからである。

●おわびと訂正

四六四号一六ページ掲載の記事中に誤りがありました。おわびし、次のように訂正いたします。

無罪→有罪

盛康さん→昌一さん